

時の贈り物 [第52回 西禅寺の阿弥陀像]

まちの文化財

石

川区の西禅寺（臨濟

を示す仏像です。

鎌倉時代の阿弥陀立像は、

特徴のある木造阿弥陀如来立像があります。

西禅寺は、今から約700

年前の室町時代以前には淨土

宗に属しており、阿弥陀如來

立像は鎌倉時代後期に「淨土

宗西禪寺」の本尊として安置

されました。

阿弥陀如來立像は、衲衣（ま

とめた布を巻いたような僧

衣）と偏衫（半身で露出した

肩に掛ける僧衣）を重ねてま

とい、右手を曲げて前方へ出

し来迎印を結び、左手は下に

おろす形をとっています。

地髪部にボリュームを持た

せ、髪際をうねらせる表現な

ど、宋代彫刻の影響がうかが

われ、やや猫背で頭部を前傾

させる姿勢や細かな木寄せな

どから、鎌倉時代後期の技巧



● ● ● ●
木造阿弥陀如來立像
場所／与謝野町字石川 西禅寺
指定等／町指定文化財（彫刻）
管理者／西禅寺
製作年代／鎌倉時代

（与謝野町教育委員会）

の除夜の鐘が鳴り始めるころになると、寺を開放することから仏像が拝見できます。寺や護持会の人々により、年越しそばや甘酒が振る舞われ、その年の108つの煩惱を払うために、一般の人でも鐘をつくことができます。

時の贈り物 [第53回 ちりめん街道の寺町的景観その2 吉祥寺]

まちの文化財

国

選定重要伝統的建造
物群保存地区の与謝

野町加悦伝統的建造物群保存
地区の特徴の一つに、寺社が
集まつた寺町さらがらの風景
があります。

その一角にある吉祥寺は、
山号を天徳山といい、臨済宗
の妙心寺派に属する禅宗寺院
です。寺伝では、延慶年間
(1308~10) の草創と
され、元中元年(1384)
に天寧寺(現福知山市大
呂)の元哉禪師の開山とい
われ、その末寺でした。ま
た、天正8~11年(1580
~1583)の戦国時代末期
には、安良城主の有吉氏の帰
依を受けたといわれています。
その景観は、二十数段の石
段を上がつた山腹に寺地を構
え、山門をくぐると正面に庫
裏、左手に鐘楼と本堂があり
ます。



上／参道と山門 下／本堂

ちりめん街道の歴
史的な町並みの一端
をなす吉祥寺の景観
は、今から178年
前から形成され始め、
現在に伝わっている
ことが分かります。
(与謝野町教育委員会)

本堂は、天保4・5年
(1833・34)頃の再建と
伝えられ、やや軽い起りを帶
びた銅板葺きの屋根の妻飾り
には亀の彫物があります。こ
れに対して、天満神社の石段
を挟んで隣り合う宝嚴寺の本
堂の屋根は、反りのある高屋
根で妻飾りには鶴の彫物があ
り、両寺の鶴と亀を表した意
匠は興味深いものです。

鐘楼は天保4年(1833)
の再建で、宝永6年(1709
年)の梵鐘が今に伝わってい
ます。この梵鐘は太平洋戦争
で供出されたものが戻ってきた
というものです。

本堂の奥手には、ちりめん
始祖の一人とされる手米屋
小右衛門の墓碑(福井墓地か
ら移転)や与謝蕪村の在住記
念碑(明治40年(1907)
建立)などの石造物があります。

加

畠 桃 儂 (1897
1985)

まちの文化財
町出身の日本画家で、明治30年、当時の加悦町に生まれました。

京都市に出て、はじめ鈴木年(1897-1985)は与謝野町の画塾に、のち山元春(やまもとしゅん)の画塾に入門し、その後京都市立絵画専門学校へ入学。文展、帝展、日展への入選をはじめ、京都市美術展には毎年入選を重ねました。後年は福知山市に移り住み、昭和60年に亡くなるまで20年あまりを同地で過ごしました。

昭和期には花鳥画の名品を数多く描いた桃僕ですが、ちりめん街道・旧尾藤家住宅の蔵から未表装の状態で見つけた大作「雨後祠参り図」では、大正期の人々の姿をいきいきと描いています。



「雨後祠参り図」絹本着色 165.0cm × 96.4cm

(与謝野町教育委員会)

本図に描かれるお宮参りの母は二人とも鉢巻姿で、一人はフリルのついた洋風の前掛けをしています。ただのお宮参りでなく、幼い子をおんぶしたまま何かの手伝いに駆り出された姿でしょうか。着物の柄も普段着風の質素なもので。疲れを見せる母の表情、ほつれた髪、背負われた子どもの様子など、けつして華やかとはいえない画題をあえて選んで描いています。

市井に生きる人々の暮らしをありのままに描こうとした昭和期には花鳥画の名品を「自然主義文学」の影響が見られる絵画作品といえます。この「雨後祠参り図」は4月から江山文庫の企画展で見ることができます。

時の贈り物 [第55回 大内峠の句碑 その一]

まちの文化財



木崎橋句碑 大正十年建立

作者は木崎樗。本名を木崎清三といい、嘉永三年（一八五〇）、当時の弓木村（現野町）に生まれました。『岩瀬町誌』によれば、若くして出奔して京都や東京で商人として活動し後に帰郷、晩年になつて俳句に親しんだといいます。俳号は大内峠の別名である樗嶺にちなんだものでしようか。

句中の「松六里」はもちろん天橋立の松並木のこと。大内峠から見る橋立の大パノラマ、その美しさを絵にするには、ただ一筋「一」を引けばまずは事足りる、と詠んでいます。

古来より天橋立の見方、楽しみ方はさまざまですが、真横に眺める「一字觀」ならではの一句といえます。

また、かつて丹後に滞在した与謝無村がこの地を離れるにあたつて描いた「天橋図贊」は、まさにこの句のような描かれ方をしていきます。極太の一刷毛で橋立の砂洲をあらわし、薄墨で松の幹と葉を簡略に描いており、俳句的な省略の極みといえる一作です。

天

橋立を横一文字に眺めるまちの名勝、大内峠の妙見堂には、この地を訪れた与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌碑のほか、参道にはたくさんの方碑を見ることができ

ます。

天

橋立を横一文字に眺め
るまちの名勝である、
大内峠の妙見堂境内の句碑を
連続して紹介しています。3
回目の今回はそのなかでも特
に古いものを取り上げます。

はし 立 や 松 を
時 雨 の 越 ん と す 蝶 夢 む

ここに精力を注ぎ、一方で
地方俳壇に積極的に活動の場
を広げました。その活動先の
一つが丹後であり、明和年間
(1764～1771)に三
度にわたってこの地を訪れて
います。

句碑には建立年月日や建立
者の名前などは一切刻まれて
おらず、蝶夢がこの句を詠ん
だ年代も明らかではありません。

天橋立の松並木が秋の時雨
に降り込められている。しか
し雨雲の間には晴れ間が見え
ており、時雨は今まさに松の
上を越えて吹き去ろうとして
いる。

丹後の秋の風物詩ともいえ
る不安定な天候「うらにし」、
その真っ只中にある天橋立を
詠んでいます。

作者の蝶夢(1732～
1796)は江戸時代中期の
僧侶で、与謝無村と同時代の
京都に生きた俳人です。松尾
芭蕉を顕彰しその作風を広め

『岩滝町誌』には、橋立の
時雨の風景を愛した蝶夢は時
雨の句をたくさん作ったが会
心の句がなかなか出来ず、あ
る日、橋立から京都に帰る途
上でようやくできたこの句を
句碑にしたいと宮津の門人に
手紙を送つたものの、まもなく
亡くなり、25年後に門人ら
が建立した、と記されています。



蝶夢句碑 (建立年代不明)

蝶夢の没年を基準として仮
にこの記述に従うならば、句
は寛政7年(1795～6)
の作で、句碑の建立は文政3
年(1820)ということになります。
なり、明和年間以降にもこの
地を訪れていることになります。

時の贈り物 [第58回 大内峠の句碑 その四]

まちの文化財

天

橋立を横一文字に眺めるまちの名勝、大内峠の妙見堂境内の句碑を連続して紹介しています。今回取り上げるのは参道の石段を下りきった所に建つ、河東碧梧桐の句碑です。

大内峠
小春雲綿と飛ぶ松沈むかと
碧

季語は「小春」。冬の初めの春に似た日差しの温暖な日のこと。

小春日和の今日、空には細かい雲がちぎった綿のようにたなびきながら日差しを浴んでいる。何とも美しいその雲を頭上に抱き、天橋立の松並木も沈んで見えるようだ。

前書きに「大内峠」とあることから、現地の景色である



河東碧梧桐句碑（大正3年建立）

ことが分かります。

河東碧梧桐は明治6年、正

岡子規と同じ松山に生まれ、同級生であつた高浜虚子と共に

子規に俳句を学びました。のちに上京し、子規のもとで

俳句革新の精神を培いました。子規の没後、新聞『日本』

の俳句欄選者を引き継いだ碧梧桐は、明治39年8月から44

年7月にかけて、二度に分けて全国行脚の旅に出ます。こ

の大旅行の様子は「二日一信」

「続一日一信」として『日本』

後には雑誌『日本及日本人』に連載されました。丹後には明治42年10月末に訪れ、11月2日に大内峠に登つていまとす。その日の「続一日一信」には、前日に見た桜山や成相寺から見た天橋立と異なる眺望に驚いた様子が記されています。

また、碧梧桐は大

正14年にもこの地方を訪れて丹後時代の蕪村絵画を丹念に調査し、翌年に『画人蕪村』を出版しました。

春

になると、梅に始まり、コブシ・桜・ツツジなど、多くの木々が花を咲かせ、私たちを楽しませてくれますが、皆さんにはコブシという木をご存知でしょうか。

コブシは谷沿いの斜面に樹生していることが多い木で、コブシの開花が農作業を始めると一つの目安になっていた頃もありました。

与謝野町には、雲岩寺境内の雲岩庵の裏庭東手に、西日本では珍しい大きなコブシがあります。

コブシは、モクレン科に属し、早春、にぎり拳状のつぼみをつけ、芳香のある白い六弁の大花を咲かせます。葉は倒卵形で果実は秋に熟し、白糸で赤い種子を釣り下げます。



雲岩寺のコブシ

- 場 所／与謝野町字岩屋 雲岩寺
- 管理者／雲岩寺
- 指定等／与謝野町指定文化財（天然記念物）
平成 13 年 2 月 13 日町指定

与謝野町教育委員会

このコブシは、東側斜面の水はけの良い位置に生育、伸びやかに直立し、目の高さの幹周りは1・9mという立派な幹を持つまでに成長した樹齢約200年の美しい樹木です。東日本では、この大きさのコブシもめずらしくあります。西日本ではあまり見られないようです。

雪解けの状況にもよりますが、通常3月下旬から4月上旬に開花時期を迎えます。地元の方の話によると、開花から1週間足らずで散り始めるという貴重な花です。ツツジで有名な雲岩寺ですが、今年はいち早く、コブシの花の観覧に挑戦してみてはいかがでしょうか。

ち

りめん街道の特徴の一つに寺社が集まつた寺町ながらの風景があります。その一角にある実相寺は、山号を功德山といい、日蓮宗の寺院です。

ちりめん街道沿いの下村家住宅（丸中）の角の信号機のある交差点を西に折れ、緩やかな坂道で目線を少し上げると、正面に実相寺の石段と山門が目に飛び込んできます。

その石段を27歩で上り、山門をくぐると、正面に本堂、右に鐘楼、左に金色堂が配された伽藍の中央に立ちます。本堂には太鼓櫓が造りつけられ、奥に庫裏が連接しています。さらにその奥手には妙見堂が但馬道に南面しています。

与謝郡寺院明細帳（明治

17年）によると、永禄元年

（1558）に金屋村の旧

城主井上正利が三男とともに功德庵を起こし、同3年

（1560）に三男を日祐と名づけ庵主としました。

その後、元亀元年（1570年）に亡くなつた正利が最初の檀徒となり、日祐を開基として本寺が始まつたと



ちりめん街道を望む実相寺。寺町的景観を形成しています。

現在の実相寺の景観は、今から248年前から形成され始め、その後、165年前までに整備されたものが基礎となつて今に伝わっていることがわかります。

与謝野町教育委員会

現存する建物は、本堂（宝暦14年（1764）建立、寛政4年（1792）改修）、山門（寛政5年（1793）建立）、妙見堂（弘化4年（1847）建立）、金色堂（昭和18年（1943）建立）と

されています。また、天保7年（1836）、住職日護の時に再建されたと記されています。